北大形成外科

第33回

アカデミー

2016.12.10(sat) 15:00-17:45

京王プラザホテル札幌

Session 1

教育研修施設リポート

市立札幌病院 形成外科　川嶋邦裕

斗南病院 形成外科　佐々木了

Session 2

大学院生研究発表

岩嵜大輔

藤田宗純

佐藤千草

前田　拓

Session 3

特別セミナー：形成外科キャリアシンポジウム

「医療人としてのロールモデル」

東北医科薬科大学 生理学 教授　河合佳子

函館中央病院 形成外科 診療部長　木村　中

代　　表：山本有平

事　務　局：北海道大学医学部形成外科学教室

〒060-8638 札幌市北区北15条西7丁目

e-mail : info@prs-hokudai.jp

運営委員長：小山明彦

PROGRAM

Session 1
教育研修施設リポート

（15:00~15:30）15分×2
Moderator：林　利彦

❖ 市立札幌病院 形成外科　川嶋邦裕
❖ 斗南病院 形成外科　佐々木了

Session 2
大学院生研究発表

（15:35~15:55）5分×4
Moderator：村尾尚規

マウス後肢リンパ浮腫モデルを用いたリンパ管新生と悪性黒色腫転移機構に関する検討

岩嵜大輔

リンパ管新生は、リンパ浮腫の改善をもたらす重要な因子である一方、悪性黒色腫の転移にも密接に関与するとされ、その機序は十分明らかとなっていない。リンパ管新生の分子機構を解析するため、新たな動物モデルを確立した。また、リンパ管新生が癌転移に与える影響を検討するため、リンパ管機能不全のレベルを段階的に変更した動物モデルを作製し検討したので報告する。

ケロイドにおける炎症制御機構に関する研究

藤田宗純

ケロイドは、線維芽細胞の増殖と細胞外基質の過剰な増生を主体とした、線維増殖性疾患であり、慢性炎症の遷延が線維化につながることから、慢性炎症性疾患と考えられている。

ケロイドの慢性炎症の原因と病態について、ケロイド内に浸潤の見られるCD4陽性T細胞とケロイド線維芽細胞との相互作用による検証、ケロイド内で炎症を引き起こす細胞と機構に着目し検証を進めている。現在までに得られている知見について報告する。

卵膜由来間葉系幹細胞のケロイド線維芽細胞への作用

佐藤千草

間葉系幹細胞には免疫調整作用、抗炎症作用、抗線維化作用、創傷治癒促進作用があり、ケロイドの病態である炎症、線維化、創傷治癒の遷延に対し抑制的に働く可能性がある。分娩時に破棄される胎盤からドナーの侵襲なく大量に得ることができる卵膜由来間葉系幹細胞をケロイド線維芽細胞に作用させその効果を検証している。研究背景とこれまでに得られた結果について報告する。

リンパ系再構築法としてのリンパ節移植についての検証

前田　拓

リンパ系において、循環に関わるリンパ管と免疫反応に関わるリンパ節は密接に関係している。リンパ節郭清術は、局所のリンパ系に一定の侵襲を加えることになり、リンパ浮腫や局所免疫低下につながる可能性がある。近年、リンパ系の再構築法としてリンパ節移植の有用性が論じられている。われわれは動物モデルにリンパ節移植を行い、循環系・免疫系の回復を検証している。現在までに得られた知見について報告する。

Session 3
特別セミナー：形成外科キャリアシンポジウム「医療人としてのロールモデル」

（16:00~）60分×2
Moderator：山本有平

《教授就任記念講演》

形成外科学と生理学をつなぐもの

東北医科薬科大学医学部生理学教室 教授　河合佳子 先生

平成15年3月に伝統ある北大形成外科から信州大学医学部生理学に移り、早14年近くが経ち、様々なことがありました。形成外科での知識と経験がその後の生理学研究や教育にどう生きたかをお話しさせていただきます。

信州大学の生理学教室は、循環生理学の中でも微小循環やリンパ循環を専門としていた教室で、集合リンパ管の自発性収縮によるリンパ輸送機能やリンパ流を増減させる因子の解明などを行っていました。そこに、細胞培養を行い分子生物学の手法を用いた研究を加えさせていただくことにより、in vivoとin vitroからの多角的なアプローチを行うことができるようになりました。また、生体内の脈管の内皮細胞には流れ刺激が加わるという観点から、培養リンパ管内皮細胞に流れ刺激をかけて遺伝子発現がどのように変化するか、という研究を進めました。一方で、リンパ管やリンパ節の可視化をテーマに、超音波造影剤ソナゾイドを用いてリンパ流やリンパ節内部を描出することにも成功しました。これらの研究には、形成外科在籍時代に習得したマイクロサージャリーの技術や悪性黒色腫のリンパ節転移探索の知識などが大変役に立ちました。

また、医学部生理学授業の際には、重症熱傷の輸液管理を含む全身管理の経験や乳幼児から高齢者までまんべんなく患者さんを診る形成外科のメリットを生かし、低学年の医学生が生理学として学んでいる知識が将来どのように生きてくるか、ということを具体的に伝えることができたと思っています。現在は、37年ぶりに新設された東北医科薬科大学医学部の立ち上げをしながら、学生生活指導を行う学生委員会の委員長を拝命し、右往左往の毎日を送っております。

このように、一見遠い関係のようにも見える形成外科学と生理学のつながりをお話しし、無駄な経験はない、ということを若い先生方にもお伝えできればと思っております。

一般病院での形成外科治療の臨床研究

函館中央病院 形成外科 診療部長　木村　中 先生

私は、北大形成外科の先輩達に形成外科のイロハを教えていただいた後に、日本形成外科学会専門医（取得当時は認定医）を取得後、一カ所の地方一般病院で形成外科診療を27年間続けている。

私の形成外科医としての人生を振り返って報告したい。

私は、昭和59年に北海道大学を山本有平教授の同期として卒業後、一緒に北大形成外科に入局し、6年後の平成元年末に認定医審査の書類を提出し、平成2年3月付の認定証をいただいた。平成元年末に函館中央病院形成外科の部長であった浜本淳二先生がお辞めになったために、認定施設を維持する必要があり私が次の施設長として派遣された。平成2年2月から現在まで26年間、留学することもなく、研究に従事することもなく、ただただ、ごく普通の診療を続けている。

私の他には北大形成外科教室から二人ないし三人の形成外科医師を派遣してもらってきた。はじめの頃は、月に2～3回ほど北大から先輩が出張に来て下さって難しい手術をこなしていた。私以外の先生達は1年ほどで交代していくため、気心が知れて仕事がやりやすくなり何でも任せられるようになると交代してしまうことが続いている。近年では形成外科に入局したての若い先生に手技を教えて、その先生が形成外科の魅力を感じて育っていってくれることにやりがいを感じている。北大形成外科教室のほとんどの専門医の先生が私と一緒に仕事をした仲間である。

田舎暮らしの平凡な形成外科医ではあるが、日本熱傷学会の評議員にさせていただいた後、本学会の他、日本褥瘡学会、日本下肢救済・足病学会の評議員にも就任し、日本臨床皮膚外科学会、日本フットケア学会の理事をさせていただいている。2010年からは日本褥瘡学会北海道地方会の代表世話人を1期3年務めさせていただき、2014年には第32回日本臨床皮膚外科学会の会長を務めた。

特に突出した業績があるわけでもない自分ではあるが、ほんの少しは北大形成外科にとって役に立っているかも知れないと、恥ずかしながら感じている。

《本講演は新専門医制度の形成外科領域講習です。》